2023年7月15日　自然を語る会　報告

『沈黙の春』第9章　死の川
Zoom＊飯田橋ボランティアセンター　参加者　24名
担当：鈴木さん、渡辺さん　報告：小川

『13歳からのレイチェル・カーソン』の「沈黙の春が訴えたこと」によると『沈黙の春』は4つの柱からなっている。そのうち、第9章は第2の柱「生命の連鎖が毒の連鎖に変わる」に相当する。

くりかえされる農薬散布により、川の生物環境に変化が起きた。森林いっぱいに広がるDDTの匂い。その後サケ、カエルなどの水棲生物が被害を受け、調べると組織の中にDDTが検出される。

鈴木さんは大学農学部時代に家畜飼料に適したスウェーデンカブを作るべく、カブとキャベツの色々な交配実験を行った。そのような実験をするのは温室の中だが、それはアブラムシにとっては最適な環境。そこで、農薬を撒いた。この時、農薬は神様だった。DDTもそのような場合には神様のように思えたことだろうが、そういう問題を私たちはどう考えたら良いか。

皆さんの意見、疑問等

〇DDTを空中から大量にばらまいたから問題だったので、撒き方によっては効果のあるものもあったのではないでしょうか？当時の農家の人にとっては、とりあえず収量が上がるということで、もしかするとありがたかったかなあと。

〇そうです。あの頃の農家にとっては、DDTは本当に良いものだと、歌まで出来ていましたし、一定の役割はしました。だけれども抵抗性をもつ害虫が現れる。そして『沈黙の春』に出てくるようないろいろな弊害や残留毒性がわかってきたのです。特に日本では母乳の中にDDTが出てしまって、赤ちゃんが母乳を通してDDTを摂取してしまうと言う大きな弊害がありました。

〇農薬を売る方はいっぱい売りたい。だから良いことしか言わないという現状があるのではないか。私たちは必要以上のものを使っている。だから被害が起きているのでしょう。

〇環境主体という考え方はとても重要。農薬会社の人にとっては、農薬が売れることが大切だし、逆にレイチェルと違うことで、意見の相違がうまれたのだろう。この時に大切なのがセンス・オブ・ワンダー。全員が自然を愛でるセンス・オブ・ワンダーを持っていたら、自然に対して謙虚でいることができるのではないか。

〇自分にとっての環境主体と別な人にとっての環境主体は違うけれども、話し合って、共通点を見いだしていき、最終的には地球レベルで統一できるように考えていくことが大切。